

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 風間 伸次郎



学位申請者 ジンガン

論文名 モンゴル語のモダリティ —コーパスに基づく記述的研究—

## 結論

ジンガン氏から提出された学位請求論文『モンゴル語のモダリティ —コーパスに基づく記述的研究—』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は風間を主査に、副査として学外からモンゴル語学の第一人者である東北大学教授栗林均氏、同じくモンゴル語学が専門の札幌学院大学准教授山越康裕氏をお招きし、学内からさらに富盛伸夫教授、川村大准教授を加えた5名で構成された。

## 論文の概要

本論文は、主にコーパスに基づき、モンゴル語（ハルハ方言）のモダリティの体系の全体像を明らかにしたものである。自作のコーパスを作成するところよりはじめ、大量の実例の分析を行っている。特に前後に出現する形式や、各形式の頻度、出現位置などに注目することによって、モダリティを示す諸形式の機能とその相互関係を解明することに成功している。重要な問題点に関しては、さらにモンゴル国ならびに中国内モンゴルでのアンケート調査も行って十分な検討を行っている。

本論文の構成は以下のようになっている。

序章では、モンゴル語の分布地域、方言差を紹介し、本論文の理解に必要なモンゴル語の形態・音韻的特徴、ならびに文の統語構造を概説する。モンゴル語のモダリティに関する本研究の枠組みもここで提示される。

第1章ではモダリティという概念、およびそれに関する重要な先行研究が紹介される。通言語的にモダリティをとらえたものとして、Bybee et al, Palmer をとりあげている。

第2章では、Mönx-amgalanを中心に、モンゴル語のモダリティの先行研究を概観し、その問題点を指摘した上で、本論文の立場を示している。モンゴル語研究の中で、モダリティを体系的に記述する動きは1990年代初期まではそれほど顕著ではなく、形態論的分析による記述にとどまっていた。1990年後半になってから、ようやくモンゴル語のモダリティを体系的に扱う研究が見られるようになった。その代表的な研究として Mönx-amgalan (1995, 1998)が挙げられる。しかしながら、Mönx-amgalan は意味優先型の

研究であり、設定された意味カテゴリーに異なるレベルのモーダルな要素が区別なく分類される傾向がある。従って、その記述は体系的とはいえない。

研究方法と資料（コーパス）の詳細もこの第2章で述べられる。

第3章では、対人的ムードとして動詞の意志形、命令形、希求形などを記述する。ここでは、コーパスから収集した大量の実例を基に、「対人的ムード」の諸形式と人称との呼応関係を考察した。それに加えて、引用節における「対人的ムード」の諸形式と引用節補語との共起関係から、それらの形式の意味範囲を定めるという方法で記述を行った。さらに、従来の研究において分類の基本となってきた人称との呼応関係に、思考内容化、否定形式との共起関係といった別の分類ファクターを加え、この三つのファクターの相互関係の中で「対人的ムード」の諸形式を位置づけた。

次に対事的ムードとして、テンス的機能を果たしながらモーダルな意味を示す動詞接尾辞 *-jee*, *-laa*, *-v* について考察する。「対事的ムード」の諸形式は従来の研究において、テンスとして、あるいはテンス的機能を中心として記述されてきた。しかし、従来の研究で「過去テンス」と言われてきたもの、すなわち、*-jee*, *-laa*, *-v* をテンスの観点から記述するだけでは、それらの多様な用法を説明することが困難であると近年多くの研究が指摘している。本論文では、それらの形式の多様な用法がそれぞれの形式のモーダルな意味に起因するものであるという考えに基づき、その多様な意味の内面的繋がりを探ることによりその機能の総括的な説明を試みている。

第4章はモーダルな接辞として、*-maar* と *-uuštai* の意味・用法を記述している。これらの形式は話し手の認識する事態の兆候、話し手の評価などを表す点でムード形式と類似するが、文の終止形として義務的に選択されるものではない。

第5章と第6章では、（狭義の）モダリティを扱う。第5章では認識的モダリティとして、判断のモダリティ形式と証拠性のモダリティ形式を記述する。ここでは主に、判断のモダリティとして、推量、可能性判断、必然性判断のモダリティを分析し、証拠性のモダリティとの相違を述べる。モンゴル語において証拠性のモダリティは独自のカテゴリーを形成しているが、その一方で判断のモダリティと証拠性のモダリティの間接的な形式も存在し、両者が連続的であることについても議論している。

第6章では、束縛的モダリティと力動的モダリティについて扱う。両モダリティを示す形式のほとんどが多義的である。束縛的モダリティ形式の多くが認識的必然性と束縛的必然性の二つのカテゴリーに分化する。力動的モダリティ形式も、「能力」、「可能」、「義務」の間で連続的な関係を示している。

第7章では、終助詞の意味機能を記述している。その際には、個々の終助詞の意味機能、それらが承接する順序、モダリティ形式との相互関係などを記述し、終助詞内部の体系を明らかにしている。

むすびの部分では、モンゴル語のモダリティの体系に関して、全体像を提示している。そこでは、0 から +5 までの数値でモーダルな度合いの軸を定め、諸形式からなる各カテゴリーをその相互関係を考慮しつつ図に整理している。

すなわち、（狭義の）モダリティの中では力動的モダリティが文の命題的な内容に最も近く、モーダルな度合いも低い。一方、推量のモダリティはモーダルな度合いが最も高く、他のモダリティ形式にも後続しうる。しかし両カテゴリーは連続性も示し、束縛的モダリティと必然性判断のモダリティは「必然性」を示す点では共通した側面を見せる。終助詞の内部体系は基本的に他のモダリティ形式が示す体系と並行しており、mön から daa へとモーダルな度合いが高まる。

### 審査の概要及び評価

上記のように氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、モンゴル語のモダリティの諸形式が織り成す全体像を提示したことにまず大きな価値がある。さらに、何よりこれまでの先行研究の言説等についても、実際に使われている生きた例文を提示しつつ、それを共起する形式や頻度などの客観的なデータによって確認し、諸形式の機能を解明したことにきわめて大きな意義がある。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。上記以外で、さらに各委員より特に高く評価されたのは、以下のような点である。

- ・プログラミングにより自ら大きなコーパスを作り上げ、正規表現等を駆使して的確な分析を行っている。有意差の有無などについても、随時統計的手法を用いて実証的にこれを示している。
- ・英語、ロシア語、モンゴル語、ドイツ語、日本語によって書かれた諸先行研究を丁寧によくフォローしている。
- ・日本語学におけるモダリティ研究の成果をよく消化し、その良い点を分析方法や体系化の枠組みにうまく取り入れている。
- ・形態論的な取り扱いやグロスのつけ方など、言語学的な分析ならびに整理が精密になされている。
- ・これまでほとんど研究が皆無であった終助詞について、承接順序などを中心にその相互関係と全体の体系を明らかにしている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からさまざまな質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・取り扱ったモダリティ形式となる品詞のうち、助動詞の定義に関しては正確に対象を限定する定義になっていない。
- ・対象の性質上、たしかに難しい面はあるが、意味機能に関してはさらに説明を尽くし、類似した機能を示す形式との違いを十分に説明してもらいたい。特に、いわゆるテンス的機能の諸形式の意味記述に関しては、「確実性」、「結果性」、「（無色）完了」とした

意味素性が、どのような面でモーダルなものであるのかを丁寧に説明する必要がある。諸用法と素性の関係がどのようになっているかについても、逐一説明を尽くす必要がある。

- ・統計的手法によって示した結果が、機能の記述において何を意味しているのか、いくつかわかりにくい箇所がある。

- ・終助詞の章はたいへん興味深いが、それだけにさらに承接の具体例をあげたり、先行研究に対する位置づけを明確にするなど、精密な記述に仕上げて欲しい。

- ・コーパスに例が現れなかった場合、それは本当に存在しないことを意味するとは限らない。またわずかな数の例外についてもその出現理由をよく考えて欲しい。

- ・日本語学のモダリティ研究の成果を取り入れている点は良いが、「対人的」「対事的」という分類に関しては、さらに検討の余地がある。希求法は「対人的」であるか、直説法は「対事的」としてよいか、再考する必要があるだろう。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で、今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。モンゴル語文法全般の記述研究の進展に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者ジンガン氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。